



Title	音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承：山形県長井市西根地区「ぼくらの文楽」を中心に：調査レポート
Author(s)	山崎, 翔
Issue Date	2021-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/83426">http://hdl.handle.net/2115/83426</a>
Type	report
File Information	fes_report.pdf



[Instructions for use](#)

音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承  
～山形県長井市西根地区「ぼくらの文楽」を中心に～

調査レポート

2015年5月～2018年7月

# 目 次

はじめに.....	1
研究の背景と目的.....	1
調査レポートの位置づけ.....	2
—第Ⅰ部 調査記録—.....	3
1. フェスと地域社会の関係を考えるきっかけ.....	3
2. 長井、井原についての印象記.....	3
2-1 長井から西根、そして草岡新町へ.....	3
2-2 少しずつ井原が見えてきた.....	5
3. これまでの調査軌跡.....	7
4. ぼくらの文楽と hoshioto.....	9
4-1 ぼくらの文楽.....	9
4-2 hoshioto.....	10
—第二部 研究の視点・方法論—.....	12
5. フェスと地域社会を媒介するアクター.....	12
6. 儀礼／芸能／フェス？.....	13
6-1 身体技法・装置としての儀礼・芸能.....	13
6-2 個人と環境.....	14
6-3 儀礼／芸能／フェス.....	14
7. 観客／参加者／潜在的主催者／主催者.....	18
7-1 フェスにおける観客から主催者へと至る経路.....	18
7-2 フェス主催者が地域社会に配置される意味.....	18
7-3 個人と環境との関わり方の四類型.....	19
—第三部 考察編—.....	21
8. 音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承.....	21
最後に—地域社会の継承から成長へ—.....	22

## はじめに

### 研究の背景と目的

本研究の目的は、2000年代以降、若い世代を中心に広まる音楽フェスティバル（フェス）について、その主催者の実践から地域社会の継承について考えることです。

本研究におけるフェスとは、1997年に始まった「フジロックフェスティバル」を一つの契機として広まった音楽イベントを指しています。それらは一様に「ロックフェス」あるいは「フェス」と呼ばれ、瞬く間に全国各地に広まり、2018年現在も数多くのフェスが誕生しています。

筆者は2016年に全国のフェス開催状況を調査しました。「①1997年以降に開始され、現在も継続している、②継続開催を念頭に置いたフェス、③ポピュラー音楽をメインとしている」の3つの条件を満たすフェスを調べたところ、2016年時点で455件のフェスを確認することができました<sup>1</sup>。これは、フェス「参加者 *participants*」のみならず、「主催者 *organizers*」が増加していることを意味しています。この点から、フェスにおいては、この20年の間にある種の「継承」が進んでいることが分かります。

一方、地域社会に視点を移してみると、地域の伝統や歴史の継承が進んでいない現状があります。特に「祭り」に着目するならば、地域の伝統的な祭りの主催者が、そのまま地域の固有性を体現する存在であるとは言い難く、世代間の継承も進んでいません。また、地域の観光資源化に伴い、祭りは住民である「参加者」よりも一時的な滞在者である「観光客」のためのものになりつつあります。

このことは、「地域社会の主催者とは誰なのか」あるいは「そもそも地域社会という枠組みは必要なのか」という問いへと結実するように思います。全国的に人口が減少する中で、個々の地域社会が競い合って移住者を奪い合うのではなく、地域内外の枠組みを考え直す必要に迫られていることは明らかです。その中であって、なぜ非土着的なイベントであるフェスの継承が進んでいるのか。筆者はそこに地域社会を再考するヒントがあるように思います。

筆者は2016年10月に全国のフェス主催者同士が対話するワークショップ「フェス観測会2016」を北海道で開催しました。南は対馬から北は札幌まで、フェス主催者10名による対話から、各フェスの特性やフェスの継承について考えました。主催者及びそのフェスには「①開催地域出身・在住、②継続性が念頭にある、③地域社会のスケールに収まる開催規模」という共通性があります。これは地域社会とフェスの関係を念頭に置いたものでした。

ワークショップでは、「フェス」として一括りにはできない個々の差異と同時に、各フェスに共通する部分が見えてきました。現代の音楽文化を考えれば、フェスが地域社会の枠組

---

<sup>1</sup> 詳細は『フェス観測会2016報告書』をご参照ください (<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65492>)。

みを超えた情報環境の中で成立していることは明らかであり、フェスの核心に迫るには「地域」という枠組みを一旦取り払う必要があるのかもしれませんが。一方で、フェスを開催する現実の場面においては、地域社会と何らかの接点が生じ、フェスと地域社会が相互に作用し合うケースも見られます。地域社会とは直接関係を持たないように見えるフェスでも、行政や地域住民の理解がなければ継続的な開催は実現できません。あるいは、主催者自らが一アクターとして地域社会に分け入り、フェスの主催を通して地域社会自体を変革する可能性も考えられます。

本調査は、このような背景を踏まえ、フェス主催者の視点から、地域社会の継承を考えることを主な目的としています。それは結果的に地域の枠組みを転回させるだけでなく、フェスの核心に迫る一つの方法論にもなると考えています。

具体的な事例としては、2011年から山形県長井市西根地区で開催されている「ぼくらの文楽」を中心とし、比較事例として2012年から岡山県井原市で開催されている「hoshioto」を取り上げます。両者は、主催者が地域社会と深く関わり、フェスの継続的な開催が地域社会を変容させる契機となり始めている事例として注目に値します。

## 調査レポートの位置づけ

筆者は2009年からフェスの調査を開始し、当初は参加者側の調査研究をしていました。その後、2013年以降は主催者側の視点に比重を移し<sup>2</sup>、2016年にかけて全国のフェス主催者の方々との交流を重ねてきました。また、2017年からは、ぼくらの文楽とhoshiotoを通じて、地域社会とフェスの関係性に着目し始めました。ただ、筆者自身、研究者としても一人個人としてもようやく地域に分け入り始めた段階であると自覚しています。

このことを踏まえ、本レポートでは筆者とぼくらの文楽・hoshioto、あるいは長井・西根・井原との出会いから現在に至るまでを振り返り、本格的な調査に入るための心構えを記しました。一個人として、フェスや地域とどのように出会い、どう感じたのかを記述し、今後の研究の視点・方法論を示したいと思っています。なお、同レポートは公益財団法人前川財団の「家庭・地域教育研究助成」(2017年11月～2018年7月)からその多くが成り立っています。ここに記して感謝を申し上げます。また、ぼくらの文楽・hoshiotoの主催者とその家族及び運営スタッフの方々、並びに地域の関係者の方々にも深く感謝申し上げます。本レポートを今後の研究の第一歩にしたいと思います。

---

<sup>2</sup> 2010年以降、小規模なフェスが増加し、主催者の存在が社会的に前景化してきたことも研究の視点を転回した一つの要因です。先述の筆者調査では、2005年以降は毎年10件以上のペースでフェスが増加し、2010年には30件が新たに開催され、さらに増加傾向となります。2011年には一旦減少しますが、2012年には毎年約50件以上のペースで増加しています(『フェス観測会2016報告書』)。また、後述するように、参加者とは潜在的な主催者でもあり、参加者と主催者は連続した存在であると筆者は考えています。

## —第 I 部 調査記録—

### 1. フェスと地域社会の関係を考えるきっかけ

そもそも、フェスと地域社会の関係性へと意識が向かったのは、筆者の個人的な来歴が多分に影響しています。多くのロックフェスでは、午前中から夜までスケジュールがびっしりと詰まり、開催期間中は会場内に参加者を囲い込むようなタイムテーブルになっています<sup>3</sup>。最寄りのターミナル駅から出ているシャトルバスの時刻表を見ると、大抵のフェスが、開場直前・終演直後に本数が集中しており、開演真っ只中の時間帯には1時間に1本程度しか運行していません。当たり前といえばそうなのですが、個人的にロックフェスの真正なファンではない筆者は、会場に常時「居続ける」ことができません<sup>4</sup>。また、はるばるその場所へ来たのだから、地域のことも知りたいし、人並みに観光もしたいという思いがあり、何とかして会場を中抜けしようとしてしまいます。ロックフェスの会場は音の関係もあり、民家から離れた不便な場所にあるので、一度出てから戻るのは一苦労です。それでも筆者の会場内外を行き来する経験は、地域とフェスの関係を研究するきっかけや地域の人との出会いにもつながっています。

それは、ロックフェスの真正な参加者の行動分析からは、ずれが生じている部分もあるかもしれません。ただし、ロックフェスと地域社会との接点を考える上では、そのずれとは何なのかを考えることが非常に重要ではないでしょうか。また、後述するばかりの文楽に代表されるように、地域の文脈と接続したフェスが増えつつあることも考えると、このようなフェスの楽しみ方は今後一つの大きな潮流になると筆者は考えています。

### 2. 長井、井原についての印象記

#### 2-1 長井から西根、そして草岡新町へ

長井を初めて訪れたのは2016年、井原は2015年です。両地域共にフェス研究というきっかけがなければこれまで接点のない地域でした。

観光の側面で行くと、長井は映画「スウィングガールズ」で市内を走る長井線がロケ地となっ



長井から西根へと向かう道  
(2018年筆者撮影)

<sup>3</sup> フェスは基本的に複数ステージが同時進行する会場設計となっており、各ステージの演奏の間には十分な空き時間があります。そのため、会場の「内部」では参加者自らがタイムテーブルを編集することができ、時間には余裕があるといえます。

<sup>4</sup> 2009年にフジロックフェスティバルに参加した際も、筆者は途中で会場を脱走し、気づいたら苗場山中腹にある「赤湯温泉」に辿り着いていました。フジロック主催者の日高正博さんはフェスの魅力を「観る」から「いる」へと変化することであると指摘しています(日高正博(2003)『やるか Fuji Rock 1997-2003』阪急コミュニケーションズ)。

たり、JR 東日本の CM で吉永小百合さんが長井の歴史的な文脈（舟運）を訪ねたりしていますが、観光地として全国的な知名度が高いわけではありません。筆者がこのことを知ったのは長井を訪れてからであり、むしろ長井を知ったのは、「ぼくらの文楽」（以下、ぼく文<sup>5</sup>）がきっかけです。2010 年代前半、筆者が全国のフェスを調べている過程でひととき個性を放っていたのがぼく文でした。「古代の丘 縄文の村」という会場のロケーション、音楽アーティスト以外に様々な「講義」からタイムテーブルが組まれている点からは、音楽フェスというより文化フェスティバルのような印象を受けました。またフェスを通じて「定住者を増やす」等の明確な目標があり、10 年間でフェスが終わる「プロジェクト」である点も興味をそそられました。その時点で、ぼく文のホームページからは地域色の強い印象を持ち、「観光客」よりも長井の「参加者」（地域住民）のためのイベントであると感じました。

念願が叶い、2016 年に初めて長井を訪れてからもその印象はあまり変わっていません。長井は山形として一括りにはできない独自の地域であり、さらに会場が立地する西根も長井とは別の地域であるという印象です。

初めて長井を訪れたとき、主催者の船山裕紀さんに山形駅まで迎えに来てもらい、車で長井へ向かいました。山形市から長井に向かう国道 348 号は左右が山脈に囲まれた道で、道を進んだ先に、やがて朝日連峰を望む長井市（及び白鷹町）が見えてきます。この道を通る度に、長井は山形から一山超えた先にある、別の世界という感覚が強くなります。

西根は、さらに長井を超えた先にある別の地域です。もともと歴史的に見ても、両者は別の地域であり、1954 年に西置賜郡長井町、長井村、西根村、平野村、伊佐沢村、豊田村が合併し長井市が誕生しています。長井の中心地に辿り着くと、さらにそこから、緩やかな起伏がある稲穂地帯を駆け上がった先に、山麓にある西根地区、具体的には西根地区公民館（現長井市西根コミュニティセンター<sup>6</sup>）が見えてきます。個人的には道中にある「虚空蔵堂（長井市成田）」を一つの境界として、西根へ入っていく心構えができます<sup>7</sup>。

主催者の船山さんがぼく文開催を契機に移住したのは西根地区内の草岡地区、さらに草岡地区内の「草岡新町」と呼ばれる一つの集落です<sup>8</sup>。草岡新町には約 60 戸の家が集積し、

---

<sup>5</sup> 老若男女問わず、開催会場のある西根地区周辺住民の多くは親しみを込めて「ぼく文」と呼んでいます。

<sup>6</sup> 2018 年 4 月から名称が変更されました。ぼく文が始まり、地域社会と関係性を持つようになったのは、公民館時代であることから、本レポートではこれ以降、公民館の名称を用います。

<sup>7</sup> これは筆者が多くの場合、長井市中心地から自転車（もしくは徒歩）を使って西根へ向かうことにも起因しているように思います。西根に住む多くの住民は自家用車で地域を越境するため、「徒歩や自転車で来た」と話すと大抵驚かれます。

<sup>8</sup> 船山さん自身は長井市中央地区出身であり、高校卒業後、宮城、東京、米沢での生活を経験しています。

空き家はほぼありません。3世代同居の家も多く、子どもの数も西根地区内で極めて多いことが特徴です。筆者がフェス研究を通じて草岡新町まで辿り着いたのは（辿り着かなければならなかったのは）、ぼく文（主催者）が長井、西根、草岡新町という幾つもの地域社会との関係性の上に成立していると思ったからです。

## 2-2 少しずつ井原が見えてきた

井原も岡山とは異なる独自の地域であるという印象を今は強く感じています。また、長井と同様、全国的に有名な観光地でもありません。岡山の内陸部に位置し、ローカル線の「井原線」が市内を走っています。ただし開通したのは1999年（フジロックが始まってから2年後）であり、井原は基本的に車社会です。



井原駅前にぽつんと置かれた hoshioto 会場行シャトルバスの案内板（2017年筆者撮影）

井原には2015年に hoshioto の一参加者として訪れたのが最初です。当時の会場は同市美星町にある「星空感」と呼ばれるオートキャンプ場でした<sup>9</sup>。美星町は「全国で二番目に星がきれいなまち」として知られ<sup>10</sup>、井原駅から車で約30分の山道を登った中腹にあります。会場は天気良ければ遠く瀬戸内海を見渡すことのできる絶景のロケーションです。この美星町という文脈は「hoshioto」の名前の由来にもなっています。

ただし、美星町は2005年に芳井町と共に井原市と合併した地域であり、井原と美星の歴史的な文脈は大きく異なります。hoshioto 主催者である藤井裕土さんは井原市の西江原町出身・在住であり<sup>11</sup>、hoshioto と美星、井原との関係も当初はそれほど意識していませんでした。井原駅前に当日設置される hoshioto シャトルバスの看板も、井原や美星へ向かうというよりも、地域とは切り離された「hoshioto 会場」へ直行する印象を受けました。

筆者が井原を意識するようになったのは、2016年からです。一つのきっかけは、hoshioto 参加時、井原駅前に同年オープンした「ゲストハウスまつり」に宿泊したことにあります。同宿は、現役の神楽師がオーナーをしており、1階には備中地方の伝統芸能である「備中神楽<sup>12</sup>」が定期的に上演される舞台が設置されています。美星には中世の歴史的な街並み

<sup>9</sup> 現在は「星空間オートキャンプ場」へと名称が変更され、美星町の若い世代から構成される団体「ir.bisei」がその運営を担っています。

<sup>10</sup> 全国初の光害を対象とした「光害防止条例」を制定・施行したまちとして知られており、「星の郷」を掲げた地域づくりを実践しています。

<sup>11</sup> そもそも藤井さんが井原市内のどの地域の出身であるかに関心を持つようになったのは、2016年にぼくらの文楽に出会って以降だといえます。

<sup>12</sup> 備中神楽は1979年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

を再現した施設である「中世夢が原」があり、神楽師が個々の神楽社中の垣根を超えて集う「中世夢が原大神楽（1995年～）（※当初は「星の郷大神楽）」が毎年開催されています<sup>13</sup>。主催者の藤井さんが hoshioto を「地元密着型」のイベントと標榜しているからには、井原や美星の地域性と何らかの関わりがあるはず、との思いもあり、徐々に井原や美星への関心が湧いてきました。

さらに、2017年には会場が同市青野町の「葡萄浪漫館」に移動しました。会場の移動に伴い hoshioto と地域社会との関係はどのように変容するののかについては、現在最も関心のあるテーマです。

少ない期間ではありますが、井原を自らの足で歩くと、井原では様々な地域資源がせめぎ合っていることに気づきます。それは、地域をどう演出して「観光資源化」するかといった地域のブランディングが求められる時代の潮流もあるかもしれません。

井原駅の駅舎は同市にゆかりのある「那須の与一」の弓矢をモチーフとしています。しかし、現在はその上に折り重なるようにして「ようこそデニムの聖地 IBARA CITY」と書かれたフラッグが駅前通りにはためいています。また、時代を遡ると、以前には「中国地方の子守唄」発祥の地として井原を積極的に売り出していたことが分かってきました。おそらく、様々な地域資源が市民の参加意識が乏しいまま客体化・観光化され、一つの井原としてのイメージに結実していないのが今日の井原ではないか、という印象を持ちました。その中で、「hoshioto」はそもそも特定のイメージへの帰結を目指す地域社会とは全く異なるベクトルを目指しているのではないか、と思うようになりました。

このような井原の体験から翻り、今度は長井の伝統的な祭りにも関心を持っていったのではないかと今になって思います。長井の「獅子」や「けん玉」あるいは現在若い世代に人気となりつつある「ボードゲーム」。これらを地域の住民が実践することが、いかに地域社会への参加意識と結びついているのかを考えてみたいと思うようになりました<sup>14</sup>。

---

<sup>13</sup> 同施設では、岡山市でライブハウスを経営する YEBISU YA PRO が主催の野外フェス「STARS ON」や先述の ir.bisei が主催する「空 宙 ガールズ ミーティング」が開催されています。

<sup>14</sup> 長井も井原も市街地は郊外化の波にさらされています。ロードサイドには、家電量販店やスーパーが点在し、長井では 2017年に道の駅もオープンしています。ぼく文主催者が「ヤマダ電機が見えると長井に着いたと感じる」と言っていたのが印象的でした。

### 3. これまでの調査軌跡

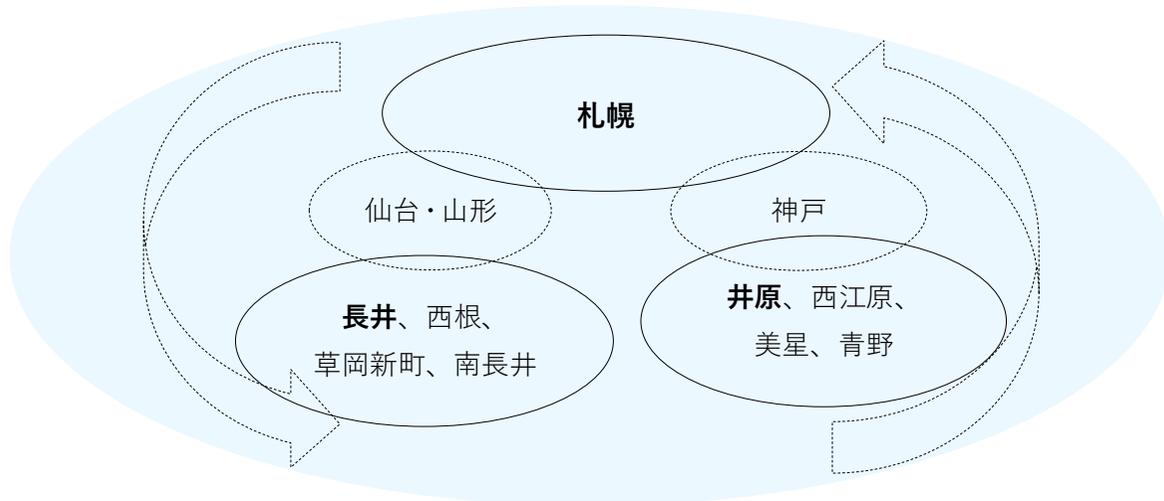
右記の表にこれまでの調査軌跡を時系列で整理しました。筆者としては、「フェスへの参加」、「主催者へのインタビュー」といった部分のみを切り取るのではなく、両地域を訪れた総体そのものが、地域社会の文脈に分け入るプロセスであり、研究において重要な点であると考えています。

フェスでは複数ステージが同時進行する会場内で、特定の地点に留まらず歩き続けることが「参加」を意味しますが、長井と井原での調査はそのようなフェスの参加経験に近づいていったように思います。2017年は実家のある熊本から福岡を経由して井原・長井へ向かい、時々研究拠点である札幌に滞在する生活をしていました。2018年からは住まいを札幌に戻し、週末に仙台もしくは山形経由で長井へ、神戸経由で井原へという生活を繰り返しました。筆者としては、この移動自体に時間の消費ではなく、複数のステージを渡り歩くようなフェスの時間に近いものを感じていました。

長井、井原ではフェス主催者の家でご飯をご馳走してもらい、宿泊もして、時には主催者の親ともフェスや地域について話をしました。どこか特定の場所へ帰るといよりも、移動する中で、多くの人と身体を通じて向き合い、時間を共有することで、幾つもの文脈が自らの身体に流れ込み通過していくような心地よさを調査中ずっと感じていました。現実の身体は目の前の特定のステージ（地域）に存在しても、他の地域の文脈が同時進行で筆者の中を流れていました。

もちろん、地域に分け入る過程では緊張を伴う瞬間も多々あるのですが、ある種、漂流者の気持ちで、疲れたら違うところへと身体と意識を向かわせました。移住でも定住でもなく、様々な関係性の網の目の中に存在する生き方は、これからの社会で必要なポジションになると筆者は考えています。

(調査プロセスの心象イメージ)



【調査軌跡の記録（2015年5月～2018年7月）】

	井原	長井
2015年	○5/29～30 井原滞在（歴城荘泊） 5/30 hoshioto'15 参加	
2016年	○5/28～29 井原滞在（ゲストハウスまつり泊） 5/29 hoshioto'16 参加	○7/8～10 西根滞在 （主催者宅、西根地区前公民館長宅に宿泊） ○9/23～26 長井・西根滞在（ホテルウィークリー ー的場泊） 9/25 ぼくらの文楽 運営スタッフとして参加 参加者アンケート実施
	10/28～30 フェス観測会2016（北海道倶知安町）	
2017年	○5/26～30 井原滞在（ゲストハウスまつり宿泊） 5/27 hoshioto'17 参加・出店 ○9/2～10 井原滞在（主催者宅（西江原町）・ゲ ストハウスまつり泊） ・福山・笠岡来訪 ・SOUND WOOD 主催者インタビュー ・高屋町子守唄の里音楽祭関係者と交流 9/10 JOKAFES（福山）オーディション参加	○9/12～24 長井滞在（南長井泊） 9/23 ぼくらの文楽 運営スタッフとして参加  ○10/3～10/11 長井滞在（南長井泊）
2018年	5/13 地域社会学会発表（東京）「音楽フェスティバルのローカル化—「参加」と「主催」に着目	○3/22～29 長井滞在（土田旅館泊）  ○5/19～20 長井滞在（土田旅館泊） 5/19 ながい黒獅子まつり 見学  ○6/1～3 長井滞在（土田旅館泊） ○6/23～25 長井滞在（土田旅館泊） 6/23 夢灯（長井あやめ祭り） 見学
	7/8 観光学術学会発表（東京）「フェス主催者が創出する参加型観光—気象的なアフオーダンスの可能性」	
	○5/26～27 井原滞在（青野町公民館泊） 5/27 hoshioto'18 運営スタッフとして参加 （駐車場班）  ○7/14～15 井原滞在（ゲストハウスまつり泊） 7/14 hoshioto スタッフのワークショップ	○7/28～30 長井滞在（タスパークホテル泊） 7/29 草岡新町夏祭り参加

（以降の調査結果に関する記述は、特段断りのない限り上記調査の内容に基づいています。）

## 4. ぼくらの文楽と hoshioto

本章ではぼくらの文楽と hoshioto の特徴について、後述する研究の視点や方法論につながるポイントを簡潔に記します。

### 4-1 ぼくらの文楽

ぼくらの文楽は 2011 年に長井市西根地区の「古代の丘 縄文の村<sup>15</sup>」で始まりました。主催者は 2008 年に「DO IT—YAMGATA MUSIC FES」と呼ばれるロックフェスを主催していましたが、自らの子どもが生まれたのを契機に「フジロックでも DO IT でもない」フェスを開催しようと決意し、同フェスが始まりました<sup>16</sup>。2 年目までは、野外のロックフェスの雰囲気を残しながらも、様々な専門家の「講義」を取り入れ、当初から 10 年間のプロジェクトである点が特徴的でした。ただし、この時点のぼく文は、地域社会にとってはあくまでも「観客」である全国のロックフェス参加者がその大半を占めていました。

転機となったのは、2013 年（第 3 回目）の西根地区公民館への会場の移動です。それは当日の朝、「強風」がもたらした偶発的な出来事に拠るものでした。会場が住民の日常的な活動の場へと移動したことで、それ以降、参加者もロックフェス参加者から西根地区及び周辺地域（長井市、置賜地域）の「子どもと親」がその多くを占めるようになります<sup>17</sup>。また、第 3 回目以降、ぼく文には公民館事業の予算が執行されるようになり、現在に至るまで入場無料での開催になっています。スタッフもロックフェスでは定番であるボランティアスタッフを募集する形式をやめ、長井市及び周辺地域の同年代（主に 30 代）が担うかたちへと移行しました。これは主催者が西根地区の草岡新町へ移住し、地域行事や長井の青年会議所等に参加したことが可能にした出来事だといえます。ぼく文は、当初、地域社会の外部（観客）から構成される非土着的な参加型イベントでしたが、現在では地域社会の参加型イベントに変容しつつあります。

しかし、上記の事実は、ぼく文が継続開催の過程で地域社会の枠組みに落とし込まれたことを意味してはいません。現在のぼく文のコンテンツは、「ボードゲーム<sup>18</sup>」「かるた」「けん玉」など、子どもが自らの身体を介して他者や周囲の環境と関わりあう遊び

---

<sup>15</sup> 同地では昭和 52（1977）年から本格的に発掘調査が行われ、旧石器時代から戦国時代に至るまで数多くの遺跡が見つかっています。現在は「古代の丘 縄文の村」として体験施設や野外展示施設、古代の丘資料館等が整備されています。

<sup>16</sup> 「D.I.Y.フェスティバルのつくりかた 船山裕紀×飯田仁一郎」より一部抜粋（出典：<http://ototoy.jp/feature/2011090300>）。

<sup>17</sup> 筆者が 2016 年に実施した参加者アンケート（サンプル数 31）では、18 名が山形県内からの参加で、その多くは長井市を含む置賜地域（14 名）となっています。また、東北以外からの参加者は 4 名となっています。

<sup>18</sup> 草岡新町にある洞松寺の住職はボードゲームジャーナリストとしても活動しています。

が中心になっています。それはイベントを通して参加者を一つの枠組みに収斂させようとするベクトルへは向かわず、むしろ参加者自らが周囲の環境との関係性をかたちづくる「潜在的主催者」へと至る経路をつくっているように思えます。しかも、上記のコンテンツや運営スタッフ、その容れ物としての公民館等、そこには地域社会で培われてきた文脈が落とし込まれているのがぼく文の特徴です。

ぼく文は 2021 年以降、東京在住の西根地区出身者及び同地区コミュニティセンターの若手職員に継承される予定です。主催者は、型通りの継承を望んでいるわけではなく、ぼく文の会場で展開されているような、参加者が周囲の環境と関係を持ち、自らの環境の枠組をつくることのできる場の継承を望んでいるように思います。

主催者は既にぼく文で展開されている場を、日常や地域社会全体（長井）へと拡張し始めています。2017 年に長井駅前でおもちゃ屋「Kimi」、ボードゲームバー「ある世界」をスタートさせ、2018 年には南長井駅前に「Hostel&Community Lounge SENN」が開業予定です。これら一連のプロジェクトは長井に、常に新たな他者を呼び寄せ、地域社会を攪乱させ、更新しようとする試みだといえます。主催者及び主催者を通じた関係性の束がオーガナイズする場合は、長井に住む若い世代の地元へのイメージを大きく変える可能性を持っているのではないのでしょうか。



第 6 回ぼくらの文楽 (2016 年) (筆者撮影)

#### 4-2 hoshioto

hoshioto は 2012 年に井原市美星町の「星空感」で始まった野外フェスティバルです。きっかけは、主催者が大学進学を機に井原を離れた際に参加したフジロックフェスティバルです。主催者は、卒業後井原に戻ると、当初は地元で長年開催されていた野外コンサート「SOUND WOOD<sup>19</sup>」を手伝っていましたが、やがて「地元でもフジロック」をとの思いを抱き、同フェスを立ち上げます。「星空感」は地元の会社が所有するキャンプ場で、当時同社に勤めていた主催者の知り合いから「何かイベントをしたい」という話を聞き、同会場での開催が実現しました<sup>20</sup>。

<sup>19</sup> 1980 年に当時の井原の若い世代が始めた野外コンサートで、2012 年まで開催されていました。

<sup>20</sup> 主催者は同所以外にも井原市内や隣接する笠岡市でロケハンを行っていました。笠岡には主催者が通っていた

hoshioto はフジロックを忠実に再現した時空間であるともいえます。会場内に複数ステージが同時進行する設計で、参加者はその中を自由に歩き周り、自らタイムテーブルを編集することができます<sup>21</sup>。同フェスが（現時点で）ぼく文と異なるのは、地域社会の文脈とは直接関係なく成立している点です<sup>22</sup>。現状では地域社会の外部（観客）に位置するロックフェス参加者がその多くを占めています。他のロックフェスと同様、コンテンツの多くを占めるのは各ステージに出演するアーティストであり、そのラインナップに左右される参加者が多くいます。したがって、彼らは地域社会としての井原とはほとんど接点がありません。しかし、2017年に会場を同市青野町の葡萄浪漫館へと移してからは、徐々に変化の兆しが見られます。コンテンツもステージ以外のワークショップやキャンプサイトが充実し始め、子どもを意識した会場づくりが行われています。また会場が広くなり、起伏のある森も含まれることで、ライブ以外の参加経験の比重も増えています。運営はボランティアスタッフが大半を占め、ステージ、アーティスト、駐車場等、各担当のチームで役割が固定されています。ただし、「途中でステージを観に行く」、あるいは「準備段階はスタッフ・開場後は参加者」といったケースもあり、ある程度柔軟に参加者と主催者が入れ替わることが可能です。スタッフは流動的ですが、毎回常連のメンバーが重要なポジションを占めるようになっていきます。スタッフの構成を見ると宮崎や京都等、地域外からの参加もありますが、コアスタッフは井原内で固められている点では地域社会に根ざした部分もあります<sup>23</sup>。主催者は、現状積極的に継承者を探してはいません。それは自らのやり方を型通りに受け継ぐことがフェスの継承ではないことを自覚しているからです。主催者は、自らの創造を超える発想を持つ人が出てきたら、裏方に回って、フェスを楽しみたいとも言っています。この点はぼく文とも通じる部分があります。また、現時点ではフェスの場が地域社会全体へと拡張する動きはありませんが、その可能性は今後十分にあるといえます。



hoshioto' 15 (筆者撮影)



hoshioto' 17 (筆者撮影)

高校があります。

<sup>21</sup> ただし、会場の広さが圧倒的に異なるため、フジロックと同じ参加体験を実現するのは現時点では難しいといえます。

<sup>22</sup> hoshioto はチケットが必要な有料イベントですが、イベント収入以外は主催者の一部持ち出しにより実現しています。また、2017年からはクラウドファンディングも実施しています。

<sup>23</sup> 前述の SOUND WOOD のスタッフ（hoshioto 主催者よりも年長者）も含まれています。

## —第二部 研究の視点・方法論—

第二部は、ぼくらの文楽を例に、音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承を論じるうえでの研究の視点・方法論を示します<sup>24</sup>。

### 5. フェスと地域社会を媒介するアクター

フェスは本来、非土着的なイベントであり、かつ年に1回仮設的に立ち現れる場です。そのため、会場や周辺地域住民への物理的・社会的配慮が行き届いていれば、開催は可能であるといえます。しかし、そこからさらに地域社会の内側にフェス（主催者）が分け入り、継続開催だけでなく、地域社会そのものに影響を与えるにはもう一段階の手順を踏む必要があります。そこでまず重要になるのは、フェスと地域社会を媒介するアクターの存在です。

ぼくらの文楽では、初開催当時の西根地区公民館館長がそれに該当します。ぼく文主催者が開催にあたり、館長と対話を重ねたことも重要ですが、館長側もぼく文主催者へ働きかけ、結果的に主催者の同地区への移住につながりました。西根地区では館長や地区長、隣組長といった地域の要職、本研究の関心から言えば「主催者」が形骸化しておらず、若い世代からも尊敬されるポジションを維持しています。それは地域社会の主催者達が幼少期から地域の行事に参加し、親世代が地域の社会的課題に対して共に取り組むプロセスを間近で見てきたことが大きいように思います。筆者が全国のフェス主催者を訪ね歩いたとき、ぼく文主催者が「ぼく文を知るなら公民館館長の家に泊まった方がいい」と、有無を言わず誘ったのは、他のフェス調査にはない出来事でした。ぼく文を知るためには、公民館館長を知らなければならないというロジックが成立する背景には、フェスを通じた地域社会の継承の可能性を見出すことができます。

また、研究者と地域社会を接続するアクターとしても、公民館館長は重要な役割を果たしています。ぼく文主催者から、主催者の住む草岡新町が特に地域の結束力が強く、その象徴の1つが「草岡新町夏祭り」であると言われ、筆者の関心は西根から草岡新町へと向かいました。その際、筆者を地域の様々なアクターと出会わせてくれたのが、草岡新町出身・在住の現西根地区公民館館長でした。現館長は一度終了した伝統的な祭りを1977年に草岡新町夏祭りとして復活させた「主催者」です。上記のプロセスから、西根・草岡新町には、地域社会に常に新たな外部を取り入れる「伝統」があり、ぼく文もその系統に位置づけることが可能なように思います。

---

<sup>24</sup> hoshioto（井原）に関しては、本調査レポートで示す視点・方法論を用い、本格的な調査を実施する予定です。

## 6. 儀礼／芸能／フェス？

### 6-1 身体技法・装置としての儀礼・芸能

フェスと地域社会の接点を見出した先にあるのは、フェスの「祭り化」（地域社会への埋め込み）でしょうか。それとも、フェスによる地域社会の転回でしょうか。これについて、人類学者福島真人の儀礼から芸能への変容に関する議論を参照したいと思います（福島 1995）<sup>25</sup>。福島は儀礼を「我々の生存にかかわる、様々なタイプの不確実性に対する、身体的過程を媒介とし、文化的に構成された制約の装置」（福島 1995：p.10）と定義します。つまり儀礼とは絶対的なものではなく、予測不可能な自然環境の中を生き抜くための「身体技法」であり「装置」なのです。儀礼は特定の村落内で完結している場合、「執行者の恣意によって改変する事は出来ない仕掛け」（福島 1995：p.78）になっています。しかし、近代化に伴い、科学技術が発達すると、儀礼の必然性（「なぜ祭りを続けるのか？」）は揺らいでいきます。儀礼とは「人間と環境のインターアクションの中に言わば遍在する」（福島 1995：p.10-11）行為の一つのパターンに過ぎないからです。

儀礼から芸能への変容とは、共同体が交通ネットワークや都市化に伴い外部へと開かれていく過程で、観客の目に晒されることにより生じます。それは、「切迫した生存感覚を持たない第三者的な人々と、儀礼執行者の間の、新たな相互作用の形成」（福島 1995：p.88）であり、観客の美的な評価がパフォーマンスを左右することになります。

福島の見解は、儀礼／芸能が「必ず継承すべきもの」「無くしてはいけない」といった絶対性を相対化する視点を提供してくれます。その場合、儀礼／芸能のパフォーマンスの背景にある共同体も絶対的なものではなくなります。しかし、福島の見解ではパフォーマンスのアクターである参加者や観客の身体が配置される環境に関しては十分な議論が尽くされていません。

仮に儀礼・芸能の参加者や観客のパフォーマンスが展開される環境が、特定の場所及び社会的に意味づけられた共同体であるとしましょう。その前提に立つと、フェスの隆盛とは、個人化・断片化した現代の若い世代（場所から疎外された観客）が、再度「観客」から「参加者」へと移行し、場所に埋め込まれようとする現象だと解釈できます。しかし、フェスにおける参加とは、複数ステージが同時進行する環境内への参加を意味します。そのためフェス研究者の永井純一が指摘するように、フェスに参加することは特定の場所や共同体への帰属ではなく、参加者の個人化・断片化をかえって促進すると

---

<sup>25</sup> 福島真人（1995）「儀礼から芸能へ—あるいは見られる身体の構築」福島真人編『身体の構築学—社会的学習過程としての身体技法』（pp.67-100）ひつじ書房

いう矛盾を孕んでいます（永井 2016）<sup>26</sup>。

これに対し、本研究では、参加者が配置される環境自体を動的に捉え直すことで、フェスにおける個人化・断片化をむしろ新たな関係性が紡がれていく契機とする立場を取りたいと思います。

## 6-2 個人と環境

参加者が配置される環境を動的に捉える為、ここでは社会学者である若林幹夫の議論を援用したいと思います（若林 2010）<sup>27</sup>。若林によると、環境は概念としては「物的／情動的」「自然／人工」の観点から区別できますが、実際に個人の前に現実として現れる環境は単純には区別できません。環境は「ある存在者がその周囲に見出す世界」（若林 2010：p.19）であり、個人によって異なった世界として現われます。また、「環境とは任意の存在者を通じて見出される、その存在者にとっての行動や感覚の可能性の広がりであると同時に、その行動や感覚を限界づける制約条件でもあるところの、世界の現われ」（若林 2010：p.32）です。したがって、他者と全く同じ環境を生きることは不可能であるといえます。

若林の論でもう一つ重要なのは、環境には空間性だけでなく、時間性も含まれているという点です。若林はそれを〈時と場〉と呼んでいます。個人と共にある環境には、それまで自らが生きてきた空間的・時間的な経験や来歴が織り込まれているのです。例えば、草岡新町の住民の中でも、個人と共に現われる環境はそれぞれ異なると考えられます。長い時間を草岡新町の土地で生きてきた世代は、新町の農地や景色に固有の意味を読み込むでしょう。一方、生まれながらにして、スマートフォン等の情報環境を享受する世代にとって、新町は同じような意味を見出す環境としては現われないと考えられます。

上記を踏まえ、本レポートでは環境を静的な対象物ではなく、個人の身体と共に現われる可変的なものとして捉えます。

## 6-3 儀礼／芸能／フェス

福島の身体技法・装置としての儀礼と芸能、若林の可変的な環境論を踏まえて、改めてぼくらの文楽からフェスと地域社会の関係を考えてみたいと思います。

1977年に復活した草岡新町夏祭りとは、そもそも伝統的儀礼であった「文殊尊祭礼」

---

<sup>26</sup> 永井純一（2016）『ロックフェスの社会学—個人化社会における祝祭をめぐる』ミネルヴァ書房

<sup>27</sup> 若林幹夫（2010）『〈時と場〉の変容—サイバー都市は存在するか？』NTT出版

を復活させたものでした。文殊尊祭礼はおそらく地域社会としての草岡<sup>28</sup>に埋め込まれた儀礼の側面が強い祭りであったと推察されます。

一方、草岡新町夏祭りは日本が高度成長期を経て、地域社会にも近代化の波が訪れた中で復活した祭りです。内容的には儀礼（獅子）と芸術的要素（歌謡ショー）が混交した祭りになっています。ただし、参加者は現在に至るまで草岡新町内でほぼ完結しており、地域外の「観客」による評価基準に晒されることはありませんでした。その結果、当時の都市的な価値観を享受しつつあった若い世代にとって、再度土地への帰属意識をもたらしたと考えられます。

では、2011年に始まったぼくらの文楽は、地域の新たな祭りになっていくのでしょうか。筆者は2018年7月29日の草岡新町夏祭りの翌日、ぼくらの文楽主催者と草岡新町夏祭りを復活させた当時の主催者による対談を実施しました。夏祭り主催者は、ぼく文が地域社会に与えたインパクトを認めつつも、それが「地域の若い世代へと浸透していないのではないか」という思いを述べます。それに対し、ぼく文主催者は以下のように応答します。

ぼくらの文楽を今、主体的に動かしてるのって、僕の友達なんですよ。それがたぶんすごく重要で、僕、38年間生きてきて、38年間をつかってコミュニティを形成してきたんですよ。だからあそこにいる人達は僕の38年分の信用を心の中に貯蓄してくれていて、それで来てくれているから。僕引っ越してきてまだ、5、6年だから、6年間で僕の信用を貯蓄してくれた人がどれだけ集まってくれるかだと思うので、たぶんすごく時間がかかると思う。

これは、ぼく文が特定の場所ではなく、様々な場を歩いて生成してきた船山さんの38年間の〈時と場〉としての文脈が一時的に特定の場（西根地区公民館）に流し込まれ・展開している出来事であることを意味します。したがって、ぼく文の継続開催は必ずしも参加者の開催地域への帰属意識の向上にはつながらないといえます。むしろ、主催者の文脈は地域社会に落とし込まれないからこそ、今後も絶えず拡張して、結果的にぼく文は豊かな場になっていくと考えられます。また、前述のようにぼく文の会場自体が、

---

<sup>28</sup> 文殊尊祭礼は草岡全体の祭礼でしたが、夏祭りは当時の草岡新町の青年クラブが「新町地区」の祭りとして復活させたものです。文殊尊祭礼及び草岡新町夏祭りの記述については、新町青年クラブ(1994)『倶楽部群像一庶務簿に残る四十八年の軌跡』、椎名勝彦(1987)「お文殊様のお祭り」(長井市地域文化振興会『長井のひとびと 第6集』)等を参照しました。

参加者個々人が環境とは可變的であり、自らがつくりだしていけるものであることを学べる場となっています。ぼく文がつくられる過程では、公民館館長や地域の子ども等、世代を問わない地域社会の人的資源、けん玉やかると、黒獅子、ボードゲーム、食などの地域の物的資源が幾重にも織り込まれています。そこには地域を否定するのではなく、地域の個々人がそれぞれ生きてきた〈時と場〉を許容し、互いに出会うことのできる場への志向を見出すことができます。

### コラム①—草岡新町夏祭り参加レポート（2018年7月29日）—

当日は、長井市中心部にあるタスパークビル（近代化の痕跡を色濃く残す建物）を自転車で出発。ちょうど集合時間の8時に草岡新町集落センターに到着する。この時点で祭りに「はまる」運命だったのだろう。前日まで、何時からどのようなかたちで参加するか迷っていた。草岡新町夏祭りは午前の準備自体が第一部であり、第二部、夜の部も含めて全員参加型の祭りである（途中参加の人もいる）。そのため、午前から参加するのが筋だと頭では分かっていたが、部外者の私が午前から行っても邪魔になるだけではないかという思いが拭えなかった。そんな気持ちで、ゆっくりと自転車を漕いでいたら、丁度集合時間に着いてしまった。全体の挨拶が始まるところで、突然私が紹介されることになり、祭りへの参加の承認を得ることになる。その後は、青年クラブのグループに参加し、LEDライト（以前は花火を打ち上げていた）の取り付けを手伝う。このグループのリーダーは見様見真似で覚えるよう促す職人気質の人で、私もとにかく杭を打ったり、紐を切ったりと（実際はほとんど役には立っていないのだが）仲間に入ろうという気持ちで必死だった。ゆるゆると作業は進み、1時間程度で休憩に入る。休憩では早速ビールだ。私には500ml 2缶、350ml 1缶が手渡され、「これを飲まないで休憩終われないぞ」と言われる。この時にクラブの人とは大分打ち解けたように思う。「すすきの」や私の地元である熊本の話など、話す内容はたわいもないことだが、とにかく夏の日差しの中、路上に座ってビールを飲む時間は楽しかった。クラブの人から「午後もはまるっしょ？」と聞かれ「はい」と流れて答える。さらに「獅子にも入れば？」と言われる。まさか獅子の中に入れるとは思っていなかった。その後はステージ設営の手伝いや新町集落センター2階で年長者が草鞋を作成している現場を見学する。ここでは、年長者から祭りが脈々と継承されてきたことを諭される。気持ち的には既に新町の青年クラブの気持ちでいた。その後、館長さんの家で昼食を取った後、第二部の獅子舞が始まる。白装束をお借りして、お酒をいただき準備をはじめ。このとき初めて草鞋を履いたのだが、とにかくきつく草鞋を締められる。それは怪我をしないためなのだが、この強靱な縛りを通して地区長から伝わってくる力強さが、地域の結束力を象徴しているのではないかと後に思った。

洞松寺へ移動し、いよいよ獅子の幕の中に入る。幕の中は男性しか入れないようだ。この幕の中が個人的に一番興奮した。幕の中に入ると視界が遮られ、先頭で獅子を持つものの動きに合わせて進むしかない。このとき、獅子の中ではある種の一体感が生まれる。しかも、そこは私を除いて草岡新町に地縁のある人たちである。獅子は警護と共に進みながら、沿道の家立ち寄り、獅子が歯打ちをして、払い清める。各家ではスイカや漬物といったものが獅子に出され、獅子舞衆はそれにあずかる。飲み物は基本的にビールしかなく、私もひたすらビールを飲む。アルコールを入れながら、獅子の幕の中に入り、上下左右に移動することを繰り返していくと次第に心地よくなってきた。獅子とは自ら

の身体を通して地域を文脈化する行為であることを強く実感した。

獅子が終わると、第一部よりもさらに草岡新町に「はまった」ような気持ちになっていた。ここでまた一旦館長さんの家に行き、シャワーを浴びて休憩させてもらう、暑さとアルコールで頭に熱がこもっていたので、とにかく横になり休憩する。3世代の家なので、夜の部に供えて子どもたちが浴衣に着替えている。ここでもスイカや漬物などをいただく。とにかく一日中ご飯が美味しかった。また改めておうちにお邪魔したい。幾分正気に戻ると、子どもたちと一緒に夜の部の会場へと向かう。もうすっかり気持ちが大きくなっていたので、何をすればいいのか、誰と話せばいいのかを考えず、ただ好きなように振る舞っていた。ステージ前のござに座り、AKEMIさんのステージを楽しむ。思えば地域の祭りの歌謡ショーでこんなに自分自身が盛り上がったのは初めてではなかったか（というか自らの地域の祭りに参加したことがない）。席では地区の子どもたちと言葉を交わすというよりも、一緒に遊びながら距離が縮まっていった。一人自分に懐いてくれた子どもの親は、現在は長井市内の総宮神社付近に住んでいるという。総宮神社は長井の総鎮守であり獅子も有名らしい。地域の人から同神社の獅子に参加しないか誘われるそうだが、自分は草岡の津嶋神社の獅子に参加しているからと断るといふ。その方、曰く、黒獅子祭りはイベントだが、新町には夏祭りがあって若い世代が獅子を舞い、さらに津嶋の本格的な獅子があるという。つまり、長井には儀礼から芸能に至るまで三パターンの獅子があり、草岡新町の獅子舞衆はそのすべてを体験できるというわけである。

気付いたら 22 時近くになり、ステージが終わりみんなで片づけをしてあっという間に祭りが終わる。最後まで皆さんの前で挨拶をさせていただいた。フジロックでは途中で脱走してしまった私だが、夏祭りは最後まで通しで参加できた。というよりも参加することが単純に楽しかった。「次は 9/16 の芋煮会だよ」と言われたのが何より嬉しかった。もちろん、私は当日のみの参加で、実際には相当な準備期間、何よりも草岡新町での日々の営みの積み重ねの中に夏祭りがあるわけで、これで仲間に入れてもらえたなんてことは恐れ多くも言えない。

ただ、もっともっと新町の人と話したい、この新町の〈時と場〉を味わいたいという思いを後にして、夜、自転車で長井の都会へと戻っていった。



獅子の様子（草岡新町夏祭り 2018 年・筆者撮影）

①午前の部	
8:00~	ステージ設営、ちよんぎり、高張提灯の障子紙貼り、獅子舞の接待準備、わらじ・お神輿用縄作り、夢灯り作り等
②午後の部	
12:40	子供会獅子お供集合～着付け
12:50	新町公民館に獅子舞衆集合
13:00	子ども会獅子お供出発
13:10	獅子舞衆出発
13:20	洞松寺ご住職様によるご祈禱
13:30	獅子出御
17:00	獅子入御
③午後の部	
19:00	開演宣言
19:00～19:05	地区長あいさつ
19:05～19:35	AKEMIステージ 第1部
19:35～19:50	花の御礼 新町夏祭りLED点灯
19:50～20:25	AKEMIステージ 第2部
20:25	花の御礼
20:30	閉演のあいさつ

草岡新町夏祭り（2018年）タイムテーブル

## 7. 観客／参加者／潜在的主催者／主催者

これまでの議論を踏まえて、儀礼／芸能／フェスを同一の位相で論じるためには、〈時と場〉としての環境をかたちづくる個人に焦点をあてるべきだと筆者は考えます。重要なのは、そのときの個人とは、物理的な身体であると共に社会的来歴（〈時と場〉）が織り込まれた存在でもあるということです。本研究では、そのような個人と環境との関わり方の特性として「観客／参加者／潜在的主催者／主催者」という四つのタイプを提示したいと思います。

### 7-1 フェスにおける観客から主催者へと至る経路

フェスを例に考えると、その体験の特徴として「観客」から「参加者」への変容がこれまで指摘されてきました。従来の音楽イベントの主流であるコンサートは、固定的な場所と芸術的なワンステージから構成される場です。コンサートでは、「観客／出演者／主催者」が分離しており、互いの役割が入れ替わる、あるいは相互に行き来する可能性は非常に低いと言えます。また、それは同時に「参加者」が不在の場であることも意味します。

一方、フェスは複数ステージが同時進行する環境で、ワンステージを視る観客から、複数ステージが組みこまれた環境全体に加わる「参加者」へと変容します。それは、個人が環境とは可変的な媒質であることを身体技法として学んでいくプロセスです。これにより、参加者は時間性と空間性を内包した〈時と場〉（タイムテーブル）を自ら枠づけることができ、潜在的な主催者への道が拓かれます。さらに誰かがつくったフェスの環境内でタイムテーブルをつくることに飽きたらない潜在的な主催者は、自らが主催者となり新たなフェスを開催するに至ります。それがぼくらの文楽であり、hoshioto なのです<sup>29</sup>。

### 7-2 フェス主催者が地域社会に配置される意味

観客から主催者へと至ったフェス主催者が地域社会に配置されることは何を意味するのでしょうか。ここでは議論を単純化して、地域社会を固定的な場所及び共同体としての〈時と場〉を生きてきた人々が主催する場として考えてみます。その場合、交通・通信メディアを通じ、外部と絶え間なく接続し続ける現代の地域社会では、儀礼による

---

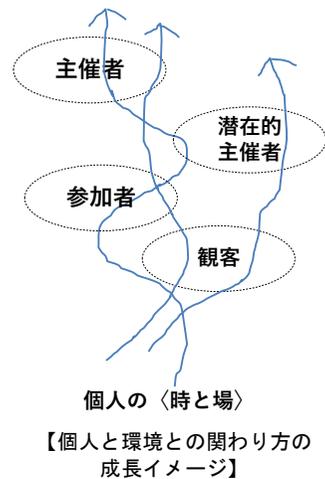
<sup>29</sup> ただし、全ての参加者が潜在的主催者から主催者へと至る経路を辿るとは限りません。参加者として特定のフェスのリピーターとなることは、フェスを固定的な場所として捉えることにつながります。それは先行研究が指摘するように、物理的・情動的なアーキテクチャを通じた環境管理型権力にコントロールされる可能性が高まります（永井 2016）。

住民の帰属意識の醸成はほとんど期待できません。そのため、特定の地域資源を演出して、観光客（交流人口）に向けた芸能を重視するケースが多いのは周知の事実です。それは、フェス参加者が忌み嫌う特定のステージに留まる観客へと逆流してしまうことへとつながり、潜在的な主催者、主催者への経路は固く閉ざされてしまいます。

このような地域社会の社会的背景を考えたとき、2010年以降、同時多発的にフェス主催者が誕生し、全国各地で場をつくる実践が進んでいることは極めて重要な出来事です。フェス主催者が生成する環境は従来の地域社会の枠組みとは直接的な関係はありません。なぜなら、フェスの環境自体が特定の枠組みをつくるのではなく、常に枠組みをつくりつづけるプロセスを個人が学ぶ装置だからです。しかし、本レポートで見てきたぼくらの文楽のように、地域社会にフェス主催者が分け入ることで、硬直しつつある環境（地域社会）を融解させ、地域内外への経路を開く契機を創出している事例もあります。ぼく文の主催者は、草岡新町夏祭りでは一参加者であり、地域社会を客観的に観るという意味では観客の側面も持ち合わせています。今後、彼が継続的に夏祭りに関わることで、草岡新町における潜在的な主催者から主催者への経路が以前とは異なったかたちで広がっていく可能性もあるのではないのでしょうか。

### 7-3 個人と環境との関わり方の四類型

上記を踏まえて、試論として個人と環境との関わり方の四類型（観客／参加者／潜在的主催者／主催者）を提示したいと思います。「観客」とは周囲の環境を知覚し、参加する前の準備段階にある存在です。「参加者」とは、身体として場に分け入り、個人の〈時と場〉を外部へと開く存在です。「潜在的主催者」とは、多種多様な〈時と場〉に触れて、自らの〈時と場〉を改めて枠づけていく存在です。「主催者」とはそのような観客から潜在的主催者へと至るプロセスを経て、可変的な環境を組織化する存在であるといえます。重要なのは、個々人が、四つのいずれかの特性を社会的な役割として担うのではなく、一個人の中に四つの特性が含みこまれている点です。しかも、それは観客から主催者へと一方向の直線的なラインとして進んでいくのではなく、四つの特性を絶えず行き来しながら成長していきます。例えば主催者になっても、常に観客の視点を持ち合わせていれば、自らを何度でも成長させることができます。



コラム②—hoshioto 観測会 2018（スタッフワークショップ）（2018年7月14日）—

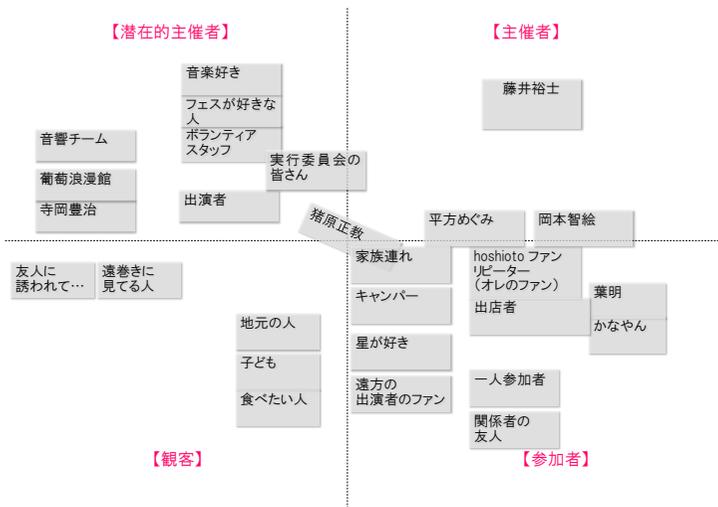
2018年7月14日に hoshioto 運営スタッフを対象としたワークショップを実施した。会場は「ゲストハウスまつり」である。目的は、ぼくらの文楽と地域社会との関係について調査経過を共有し、hoshioto スタッフがフェスや地域社会をどのように考えているかを明らかにすることであった。1週間前には西日本豪雨があり、開催も危ぶまれたが、6名のスタッフと hoshioto の会場である葡萄浪漫館の職員の方（主催者の中学時代の同級生）が参加してくれた。ワークショップでは、フェス観測会 2016 の取組を紹介した後、ぼくらの文楽（主催者）がいかにして地域に根づきつつも、地域社会自体を転回させ始めているかについて話をした。行政の予算で実施していること、幅広い世代が参加して点などの特徴を説明し、非常に興味深く聞いていただいたと思っている。hoshioto も 2017 年から会場を移し、地域住民の参加が増えてきた状況であったから、ちょうどよいタイミングであったのかも知れない。

その後は「hoshioto の継承」をテーマに話し合った。各自の自己紹介から始まり、hoshioto に関わった経緯や「自分は主催者になれるか？」といったことを語ってもらった。ほとんどのスタッフが「誰かを支える役が合っている」との答えで、「主催者になりたい」という回答はなかった。しかし、本論で述べているように、必ずしも型通りに継承するのがフェスの継承ではない。フェスが継続して行けば、スタッフからあるいは参加者からいずれ新たな主催者が誕生するだろう。主催者はおそらく、新たな主催者が誕生することを実感するまでフェスを継続するのではないだろうか。その後、hoshioto 7年間の開催のプロセスをスタッフ間で共有・対話した後、hoshioto における「観客／参加者／潜在的主催者／主催者」をマッピングしてもらい、参加したスタッフにも自らをマッピングしてもらった。hoshioto では回を重ねるごとに、徐々に観客から参加者、潜在的主催者へと移行が進んでいることが見えてきた。この先は、また新たな観客を招き入れるために間口を広く（例えば有名アーティストのブッキング）しつつ、主催者への道も確保するために、参加者自らが楽しみを見出すためのワークショップやキャンプサイトの場も充実していかなければならないだろう。また、ぼく文のことを話す過程では、ぼく文への対抗意識

のようなものも見え隠れしていたように思う。次は hoshioto とぼく文運営スタッフ同士の観測会を開催したいと企んでいる。

最後に個人的には、hoshioto のスタッフとゆっくりと話す機会は初めてであり、夜の hoshioto'18 打ち上げではさらに多くのスタッフの方と話すことができ、少し hoshioto に「はまされた」ことが嬉しかった。また早く井原に行きたい。

【hoshioto ワークショップマッピング】



## — 第三部 考察編 —

### 8. 音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承

第三部では考察編としてこれまでの議論を簡潔にまとめてみたいと思います。本レポートでは、現代の音楽フェスを通じた地域社会の継承を考える上で、その中心的な存在である「主催者」に着目し、儀礼・芸能の主催者との差異と共通性を考えてきました。

地域社会における儀礼から芸能への変容とは、参加者のパフォーマンスが地域社会の外部（観客）の評価にさらされ、従来の機能である参加者の帰属意識をもたらさなくなることを意味します。筆者は、そこで問われるべきなのは、パフォーマンスの質ではなく、パフォーマンスを遂行する身体が配置される準拠枠であると主張しました。従来の儀礼・芸能に関する議論では、その準拠枠はあくまでも固定的な場所と共同体を前提としてきました。本レポートでは、その準拠枠を可変的な個人と環境として捉え直すことを試みました。儀礼／芸能／フェスは、いずれも個人が環境との関わり方を身に着けていくプロセスとして捉えることで、はじめて同一の位相で論じることができます。

個人と環境を可変的に捉えたのは、地域社会を否定するのではなく、その枠組みを問い直すことで、新たな地域社会を展望することを意図したからです。事例として取り上げた草岡新町においても、住民を一元的に捉えるのではなく、個人が生きてきた一つひとつの〈時と場〉に目を向けることが重要だと筆者は考えています。そのことが、草岡新町以前の歴史へと遡行することを可能にし、また未来の地域社会を展望することができるからです。

そのために、本レポートが提示したのが「観客／参加者／潜在的主催者／主催者」という個人と環境との関わり方の四類型です。重要なのは、この四つの関わり方はそれぞれ別個の存在ではなく、一個人の中に四つの側面が含まれ、混ざり合っているということです。個人が生きる〈時と場〉のプロセスにおいては、「主催者」が前景化することもあれば、再度「観客」として自らを省みる時期が訪れるかもしれません。

地域社会の継承とは、さしあたってこのような4つの個人と環境との関わり方を身に着ける場を創造することから始まるのではないのでしょうか。

レポート冒頭の議論に戻るならば、フェス（主催者）が全国各地で同時多発的に生じている現象とは、一見地域社会の文脈とは関係のない、断片的な現象に見えます。しかし、地域社会の枠組みを一旦取り払い、主催者同士を相互に接続してみると、「個人と環境との関わり方を身につける場」が拡張する現象として見えてきます。また、その中の幾つかの事例ではフェス主催者が地域社会の主催者と接触し、地域社会の枠組みを解きほぐし、新たに活性化するプロセスがまさに現在進行形で展開されているのです。

## 最後に―地域社会の継承から成長へ―

最後に今後の研究の見通しを示しておきたいと思います。可動性がますます高まる現代社会において、地域社会は従来の物理的・社会的な枠組みをかたちづくることから、その枠組みを融解させ、地域社会が相互作用を通じて次世代の人間を育成することが求められていると筆者は考えます。その実践者の象徴的存在が本レポートで取り上げたフェス主催者 (*organizers*) ではないでしょうか。そう考えた時、地域社会とは常に新たな個人の創造性を育み続ける土壌になるはずであり、今後は地域社会の「成長」がキーワードになると考えます。また、その成長を絶えず止めないことが地域社会の継承を意味するのではないのでしょうか。地域社会の成長は、人類学者ティム・インゴルドの一連の著作から着想を得ています (Ingold 2007; 2011; 2013)<sup>30</sup>。インゴルドは世界を常に変転し続ける「ウェザー・ワールド」と捉え、人間もその一部である可変的な生命体・運動体として位置づけられます<sup>31</sup>。このウェザー・ワールドにおける、(人間以外も含めた) 生命体の運動が「ライン」であり、それがつくられるプロセスが「メイキング」です。インゴルドのいうラインは直線ではなく、糸のように様々なものが折り重なって成立する絶え間ない運動です。それらは点と点で結ばれるネットワークではなく、常にその先端が伸び続けていく網細工 (メッシュワーク) として位置づけられます。

フェス主催者がつくるタイムテーブルとはそれぞれが固有な生としてのラインであると筆者は考えています。注意すべきは、研究者がこのラインを安易にネットワークやコミュニティとして結びつけるのではなく、それら (ラインズ) が予測できない方向へと進む道を主催者と共に歩んでいくという実践です。

ここまで駆け足で約3年に渡る調査プロセスを振り返ってきました。現時点で調査レポートをまとめたのは、論文に落とし込む前に、筆者が一人の人間としてどのようにフェス主催者や地域という環境と関わってきたのかを振り返りたいという思いからでした。なぜなら、この約3年間という歳月は、筆者の生き方自体も大きく組み替えられた時間だったからです。もはやこの先の人生もどうなるかわかりませんが、それ自体を楽しむ感性が身に着いたことが、筆者にとっての一つの成長だと自負しています。フェス研究はまだ始まったばかり。これからがますます楽しみになってきました。

---

<sup>30</sup> Ingold, T (2007) *Lines: A Brief History*: Routledge. [工藤晋訳 (2014) 『ラインズ―線の文化史』左右社]、(2011) *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge, and Description*. New York: Routledge、(2013) *Making: Anthropology, archaeology, art and architecture*, Routledge. [金子遊・水野友美子・小林耕二訳 (2017) 『メイキング―人類学・考古学・芸術・建築』左右社]

<sup>31</sup> フェス主催者同士のワークショップ「フェス観測会」の名前の由来は、フェス主催者が予測できないかたちで広まっていく現象を氣象的に捉えようとしたものであり、このインゴルドのウェザーワールドの概念が一つのモチーフになっています。

音楽フェスティバルを通じた地域社会の継承  
～山形県長井市西根地区「ぼくらの文楽」を中心に～  
調査レポート

平成 30 年 9 月発行

山崎翔

(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院  
観光創造専攻博士後期課程)